

Bakhtin の対話理論における引用概念の実証研究 への援用

Consideration of the Use of “Citation Concepts” in Empirical Research
in Bakhtin’s Dialogue Theory

田坂 逸朗^{†1}

Tasaka Itsuo^{†1}

^{†1} 青山学院大学大学院 社会情報学研究科

^{†1} Graduate School of Social informatics, Aoyama Gakuin University

Abstract: Within the expansive realm of Bakhtin’s theories, including the Dialogue Principle and Polyphony, this study undertakes a nuanced reexamination by accentuating the underutilized “citation concept” within the domains of psychology and cognitive science. This inquiry reveals the profound significance of the “citation concept,” prompting a distinct research trajectory separate from the conventional “Sociocultural approach.” I advocate for its incorporation in the empirical research analysis, proposing a set of meticulously considered analytical strategies. This recalibration not only enriches the understanding of Bakhtin’s Dialogue Theory but also underscores the imperative role of the “citation concept” in research areas immersed in this theoretical framework.

キーワード: バフチンの対話理論, 引用, 実証研究, ワールドカフェ

Keywords: Bakhtin’s Dialogue Theory, citation, empirical research, World Café

1. はじめに

本論稿は、Bakhtin の対話理論における〈他者の言葉の伝達論〉、すなわち“引用概念”を、捉え直し、その新たな意義や可能性を提示し、心理学や認知科学における実証的な研究において、その分析に援用することを提案する試論である。

哲学者であり思想家であった Bakhtin の著作は、Kristeva によって再評価され、Wertsch が人類学、心理学、認知科学にその概念を援用した。「精神への社会文化的アプローチ」の理論化に、Bakhtin の諸概念を用いることは、Wertsch によって提案され、

方向付けられた (Wertsch, 1991 田島他訳 2004)。桑野 (2020) は、昨今では、「積極的に Bakhtin の理論や思想を「現場」で実践していこうとする動きが目立ってきている」と述べている。それは、ポリフォニー論やカーニヴァル論を文学や文化の解釈装置として適用することに加えて、対話原理が再評価され、現場の応用に活かされているというひろがりだという (桑野, 2020)。

Todorov (1981 大谷訳 2001) は、「個人的なものと社会的なもの」をことばの現実はどう捉えるかがバフチンの大きなテーマであったとしている (Todorov, 1981 大谷訳 2001)。さらには、「Bakhtin にとって「社会」は第二者が出現するやいなや開始する」(Todorov, 1981 大谷訳 2001) とも解説して

いる。Todorov のいう〈発話の社会性〉について、Bakhtin 自身は、「他者のことばの伝達という現象を社会学的方向において問題化すること」が「本書の課題」であると、『マルクス主義と言語哲学』において記述している（Bakhtin, 1929 桑野訳 1989）。そして、その社会性として注目に値する〈他者のことばの伝達〉の“現象”の形態を、間接話法、直接話法、およびその変形と、3つに分類している（Bakhtin, 1929 桑野訳 1989）。桑野（2020）も、〈他者のことばの伝達〉を“引用概念”として解説するにあたっては、「バフチンからすれば、引用は広義の〈対話〉であった」と概説している。具体的なことばの現実、〈発話の社会性〉、すなわち〈他者のことばの伝達〉は、Bakhtin にとっての、大きなテーマであった。

いっぽう、Wertsch（1991 田島他訳 2004）は、「私の分析の大きな目的は人間の行為がどのように社会文化的に状況づけられているかを明らかにすること」であると述べている。さらには、その前提として、「社会文化的状況には本来的に権力と権威が含まれていると考えている」とも述べている（Wertsch, 1991 田島他訳 2004）。Wertsch にとっての Bakhtin は、「精神への社会文化的アプローチ」という命題の起点であった。

第4節で詳述するが、Wertsch が「社会文化的アプローチ」への傾注の起点として、「バフチンの他人の言葉論の議論を取り上げることはしない」と述べ、かつ、「社会文化的コンテキストの中で社会的、心理的過程の基本的な問題に限って概観する」と言明したことからするなら、Wertsch には二つのアプローチがありえたと考えていい。後者が、Bakhtin の諸理論を文化の解読装置として適用する「社会文化的アプローチ」であるなら、前者は、〈他者の言葉の伝達〉の現象そのものへのアプローチである。このアプローチは、「社会文化的アプローチ」と同じく〈発話の社会性〉に端を発しつつ、対話原理を現場の応用に活かすための〈他者のことばの伝達〉の現象解明を志向する。「実証的な研究」として〈他者のことばの伝達〉を検討し、話し手と聞き手が対峙する対話の場面における伝達の実相へ注目する“現象”の研究である。この志向は、Todorov（1981 大谷訳 2001）のいう（Bakhtin の大きなテーマとしての）「個人的なものと社会的なもの」をことばの現実はどう捉える

かを、より「個人的なもの」側から深掘りすることが出来るものであろう。つまり、〈他者のことばの伝達〉、すなわちそれは、“引用”という行為の研究という、Wertsch が起点を示したもうひとつのアプローチである。

本論稿では、あらためて Bakhtin の対話理論の“引用概念”を捉え直す。それはどんな射程をもつのか。そしてそれは、心理学、認知科学の実証的な研究にどんな可能性をひらくのか。話し手と聞き手が対峙する対話の場面に発生する〈他者のことばの伝達〉の現象へ注目し、“引用概念”を理論的枠組みに援用する実証研究の準備過程をなすよう、可能性と意義を検討する。

なお、以下、〈他者の言葉の伝達〉と、〈他者のことばの伝達〉、〈他人の言葉の伝達〉、対話の原理と対話原理、対話関係と対話的關係等々、表記が揺れているが、これは、その引用元にできるだけ忠実に表記したことによる。

2. 対話の原理と〈引用のモザイク〉

Bakhtin のラブレ研究、ドストエフスキー研究にはじまる理論群は、文学研究にとどまらず、哲学、言語学、記号論、心理学などに大きな影響を与えてきた（桑野、2020）。ポリフォニー論、発話理論、参加的思考、他者、交通（相互作用）、ことばのジャンル、二声化（引用論）、脱中心化、民衆の笑い、カーニヴァル論、グロテスク・リアリズムなどといった、小説に見られる「出来事」のターム化、理論化を推し進める中で、対話理論の大系は大きなエポックとなっている。桑野はこのエポックを、「思想家 Bakhtin のいちばん重視するところは対話原理」であったと解説する（桑野、2020）。

Kristeva は、バフチンの諸理論のうち、おもに、対話の原理（対話主義）、ポリフォニー、カーニバル性、笑い、クロノトープなどを解説した。なかでも、「Bakhtin の見解」で重要なものは、〈ポリフォニー〉であるとしている（桑野、2020）。そして桑野は、〈ポリフォニー〉を、のちに Kristeva が「テキスト相互関連性」の概念へと発展させる先駆けと捉えていたと

みなしている。Kristevaによれば、「どのようなテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もうひとつの別なテキストの吸収と変形にほかならない」ことを Bakhtin が発見したのだという（桑野，2020）。〈発話の社会性〉としての〈他者のことばの伝達〉は、吸収され変形され、〈引用のモザイク〉を形成する。

Todorov（1981 大谷 訳 2001）は、Bakhtin、および Bakhtin Circle と呼ばれる研究グループの著作を紹介しながら、その諸理論を〈対話の原理〉を中心に再整理しつつ、多声性、ポリフォニー、カーニバル性などを解説した。「Bakhtin がことに特別な関心を寄せているのは」、「発話の対話関係」であると述べている（Todorov, 1981 大谷 訳 2001）。Bakhtin は「ランガーシュの科学」、すなわち抽象的な文法形態（ラング）と発話コンテキストとのあいだの相互作用の産物としての人間的発話を科学の対象にすることを提案した。かつ、その「発話のもっとも重要な性格（略）とは、その対話関係（ディアロジスム）である。すなわち、発話の間テキスト的な次元である。」と述べている（Todorov, 1981 大谷 訳 2001）。

佐々木（1988）は、Bakhtin の『ドストエフスキイ論』の解説にあたって、1974 年時点の「この本における Bakhtin の根本のモチーフが「対話的原理による人間の把握」であること、それは結局、精神としての人間の『言語表出、しかも対話的關係において捉えられたその機能的理解』ということになる」との見立てを紹介している（佐々木，1988）。

心理学において Bakhtin の諸理論が研究に援用される際は、発話理論、対話原理、ポリフォニー論、カーニバル論などといった論説に注目されることが多い。やまだ（2008）は、「対話原理（dialogism）」をもとに、Bakhtin の対話概念の4つ観点を4つに再整理している。4つは、以下である（やまだ，2008）。

第1の観点「自己」：「自己は他者を媒介にし、他者との関係性に深く根ざす社会的存在」である

第2の観点「他者のことば」：自己の独語（モノローグ）にみえることばも、隠された対話関係を含めて他者のことばとの対話（ダイアログ）である」

第3の観点「ことばの対話性と多声性」：対話のことばは、アクセントを含めた他者の「声」を含んでおり、単一の声のようにみえても、ポリフォニー（多声）的な響きを伴っている

第4の観点「テキスト間の対話」：人間は、「テキストをつくりだす存在」であり、その「テキストとしての人間」が対話をする

膨大な Bakhtin の論説の中で、「あらゆるものは対話的關係のなかにある」とする対話原理や「複数の対等な意識が、非融合状態で組み合わせられて出来事という統一体をなしている」とするポリフォニーの概念が多く議論され、援用されているなか、「引用概念」は、どんな位置にあるのだろうか。次節では、Wertsch の解釈をみていく。

3. 社会文化的なものと個人の連続性

Wertsch（1991 田島 他 訳 2004）はとくに、Bakhtin の諸理論を「精神間および精神内機能に含まれる媒介手段、とくに言語が、どのようにして社会的文化的に状況づけられているかを射程に収めている」ものとして、Vygotsky の主張——発生的分析、高次精神機能、媒介された行為、内言など——の理論的補完に援用している（Wertsch, 1991 田島他 訳 2004）。そして、「Vygotsky の主張をより発展させていくための Bakhtin の概念」としては、以下の諸点を挙げている（Wertsch, 1991 田島他 訳 2004）。それは、発話の役割への焦点化、声の概念、「Bakhtin のアプローチの中でもっとも基本的な理論的関心」としての対話性、多声性、他者のことばにおける声の引用という相互活性化、別の声を伝えていく過程として

のパロディ、社会的言語、腹話、混成的構文、ことばのジャンルといった諸点である。なかでも強調しているのは、「社会文化的に状況づけられたものとしての媒介された行為こそが一方の文化的、歴史的、制度的な状況と、他方の個人の精神機能とに本質的な連続性を与えているのであり、パフチンの考えが関与するのもまさにこの連続性においてなのである」という点である (Wertsch, 1991 田島他訳 2004)。

桑野 (2020) は、後期 Bakhtin を引用しつつ、そこにあるターム「創造的理解」を解説して、「Bakhtin の『最後のメッセージ』ともいえるこの『より大胆に可能性を利用せよ』には、Bakhtin のこうした対話主義が凝縮されている」としている (桑野, 2020)。そこで引用しているのは、この「より大胆に可能性を利用せよ」という 1970 年の寄稿文からの一節である。

「ひとつの意味は、もうひとつの、『他者の』意味と出会い、触れあうことにより、みずからの深みをあきらかにする。両者の間にいわば対話がはじまるのであり、対話がこれらの意味、これらの文化の閉鎖性と一面性を克服するのである。(中略) 対話的出会いにさいしては、両者は溶け合うこともなければ混じり合うこともなく、それぞれがみずからの統一性と開かれた全一性を保っているのだが、たがいに豊穡化する」(桑野, 2020, p.303)。

そして、「ここでも『創造的』、つまり両者のあいだに新たな意味が生まれるような対話的關係が強調されている」としている。

両者のあいだに新たな意味が生まれるような対話的關係は、〈他者のことばの伝達〉、すなわち「他者のことばにおける声の引用」から、間テクスト的な次元で〈引用のモザイク〉を形成し、その相互活性化が、社会文化的なもの和个人の精神の連続性のなかで、たがいに豊穡化していく過程をもたらす。「他者のことばにおける声の引用」は、間テクスト的な次元で、豊穡化をもたらす重要な要素となっている。

4. Wertsch は〈社会文化的アプローチ〉へ

Wertsch (1991 田島他訳 2004) によれば、Bakhtin へ向けられる批判はテキストの詳しい解釈を具体的に提出していないというものだが、一つの現象に限りそれについて詳しく吟味しているという。

その現象というのは「他人の言葉〔他者のことば〕」(邦訳『言語と文化の記号論』, p.249)である。他人の言葉とは、ある一つの声(「報告する声」)が他者の発話(「報告される声」)を報告するメカニズムのことである。パフチン (Volosinov, 1973) が他人の言葉に特別の関心をよせているのは、他人の言葉を複数の声になんらかの形で互いに接触するアリーナとみることができるからである。それゆえ、このアリーナこそ、テキストの単声性と対話性、権威的な言葉と内的説得力のある言葉の問題を探索する絶好の場所となるのである。(Wertsch, 1991 田島他訳 2004, p.109)

そして Wertsch (1991 田島他訳 2004) はこう続けている。「ここでは他人の言葉の問題について包括的にレビューするつもりはない。また、パフチンの他人の言葉論に刺激されて今日の研究者が展開した無数の議論を取り上げることもしない。その代わりに、社会文化的コンテキストの中で社会的、心理的過程を吟味するのに役立つだろうと思われる基本的な問題に限って概観することにしたい」(Wertsch, 1991 田島他訳 2004)。そしてこれこそが、社会文化的状況における精神間機能と精神内機能の理解にも有用であるとするのだという (Wertsch, 1991 田島他訳 2004)。これは、Wertsch による「社会文化的コンテキスト」への傾注の宣言であり、その宣言通り、この記述以降、論の展開は、社会文化的アプローチへと向かっていく。

この「社会文化的アプローチ」と、Wertsch が「取り上げることとはしない」とした「パフチンの他人の言葉論の議論、すなわち「〈他者の言葉の伝達〉の現象へのアプローチ」の関係を図にすると、図 1 のようになる。

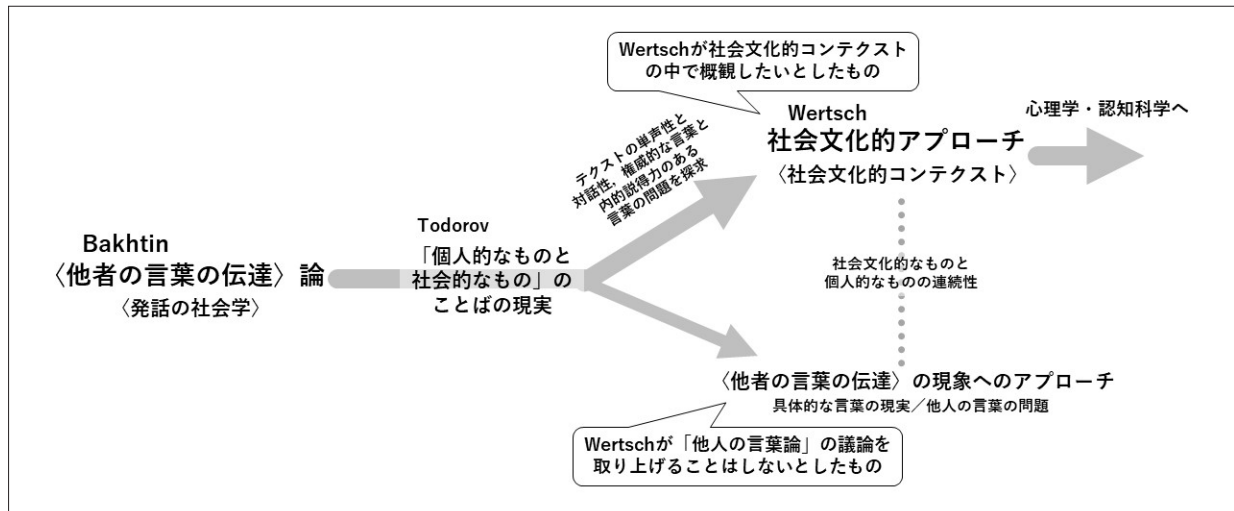


図1 〈他者の言葉〉論からの二つのアプローチ

(2023_ 紀要 _3_ 図)

「〈他者の言葉の伝達〉の現象へのアプローチ」は、「社会文化的アプローチ」と同じく〈発話の社会性〉に端を発しつつ、〈他者のことばの伝達〉の具体的な現象を解明する。話し手と聞き手が対峙する対話の場面における伝達の実相へ注目するあらゆる志向がこれに含まれる。

では、具体的には、「〈他者の言葉の伝達〉の現象へのアプローチ」は、どんな研究となるだろうか。おそらくは、「テキストの単声性対対話性、権威的な言葉と内的説得力のある言葉、といった問題の探求」を含む、〈他者の言葉〉論からそれをひもとくことになる。

5. 〈他者の言葉論〉

Bakhtin (1929 桑野訳 1989) は、〈他者のことば〉の問題は、「ことばのなかのことば、発話のなかの発話であると同時に、ことばについてのことば、発話についての発話でもある」ところにあるとしている。「〈他者のことば〉の問題は、「他者の発話の伝達形式の変化の規定」に、また「他者のことばや話し手の人格を言語が感じとるその形態のなかに」、「鮮明にあらわれてくる」とも述べている (Bakhtin, 1929 桑野訳 1989)。

言語というものは、それ自体で存在しているわけではなく、具体的な発話、具体的なことば行為の個々

の構造とむすびつきはじめて存在する。発話を通してのみ言語は交通と接触し、その生き生きとした力につらぬかれ、現実となる。(Bakhtin, 1929 桑野訳 1989, p.188)

この「他者の発話の伝達形式」の詳細、および「他者のことばにおける声の引用」について、Bakhtin 自身は、「間接話法、直接話法、およびそれらの変形」として論述している (Bakhtin, 1929 桑野訳 1989)。その詳細を、Kristeva, Todorov, 桑野, Wertsch は、ともに再解釈し、端的に再整理している。原典は同じでありながら、それぞれが少しずつ違うタームによるまとめをしている (表 1)。言語哲学、文芸評論、哲学、思想研究、状況論、それぞれの領域からの見立ての違いもある。これらを列挙しつつ、引用概念の理論枠組みの検討の出発点として、これをみていく。

Bakhtin (1929 桑野訳 1989) は、間接話法、直接話法、およびその変形というパターンを、他者のことばの能動的知覚の傾向として提示した。その目的は、他者の言葉の伝達という現象がもつ問題を、言語学にとどまらず、社会学的方向に展開することにあった。Kristeva (1969 原田訳 1983) は、文芸評論の立場から、Bakhtin の諸理論を物語の構造論的研究として、また記号論的な進展のために、「物語のなかの言葉の分類」として分析した。Todorov (1981 大谷訳 2001) は、哲学の領域から、「他者の言説に『出会う』場」、「形式」、「変化しうる程度」の問題を省察するために、Bakhtin の「間接話法、直接話法、お

よびその変形というパターン」を「表象される言説」として再整理している。桑野（2020）は、思想研究の文脈において、「二声的な言葉」こそが Bakhtin の〈引用論〉の前提であるとして、「ドストエフスキイにおける言葉（文体論のみ）」における論述を「言葉の分類図式」として紹介している。Wertsch（1991 田島他訳 2004）は、〈権威的な言葉〉と〈内的説得力のある言葉〉の問題を論じたうえで、〈他者の言葉論〉を、「ある声が他の声と接触し互いに活性化し合う、権威性の度合い」として解説している。

5-1. Bakhtin の〈他者の言葉論〉

Bakhtin（1929 桑野訳 1989）は、間接話法、直接話法、およびその変形というパターンは、他者のことばの能動的知覚の傾向をあらわすとした。そして、「各パターンはそれぞれに創造的に、他者の発話を一定のパターンにのみ固有の方向であつかう」としている。各パターンは以下としている（Bakhtin, 1929 桑野訳 1989）。

[パターンと変形]

直接話法

- ・物化され、客観的定義づけが濃い影を投げかけ、

評価や情緒が主人公（筆者注：発話者のこと）のことばの上に移る

- ・話し手の意向を構文や構文的アクセントで表現する
- ・著者（筆者注：発話者のこと）のコンテキストの弱化をとまなう

間接話法：他者のことばの分析的伝達

- ・伝達するだけでなく、同時に他者の発話を分析する
- ・ことばのもつ情緒的感情的要素が、発話の形態ではなく内容に翻訳され、注釈的変形として移されている
- ・話し手そのものを性格づける表現として伝えられる

変形：印象主義的変形

- ・他者のことばをきわめて自由に解釈し、それを縮めたり、しばしばテーマや主調音を示す

5-2. Kristeva の〈他者の言葉論〉の解釈

Kristeva（1969 原田訳 1983）は、文芸評論の立場から、文学および人文科学の記号論的な可能性を

表 1 〈他者の言葉〉論

Bakhtin (1929 桑野訳 1989)	Kristeva (1969 原田訳 1983)	Todorov (1981 大谷訳 2001)	桑野 (2020)	Wertsch (1991 田島他訳 2004)
[パターンと変形]	[物語のなかの言葉の分類]	[表象される言説]	[他者の言葉を志向する言葉]	[報告の発話の基本的な方法]
直接話法：物化され、客観的定義づけがことばの上に移る	第一のカテゴリー「直接話法（文体的統一）」（模倣、反復）	モノフォニー的（単声的）：直接話法	(1) 一方向の二声の言葉（直接話法）（文体模倣、語り手による語り）	1) 直接話法：引用する声と引用される声の間に声の接触はみられない
間接話法：伝達するだけでなく、同時に他者の発話を分析する	第二のカテゴリー「対立するものの並存」（パロディ）	ディフォニー的（二声的）：受動的（様式化、パロディ）	(2) 多方向な二声の言葉（パロディ）（パロディ的な語り）	2) 間接話法：引用する声と引用される声の間に接触と相互活性化が認められる
変形（印象主義的変形）：他者のことばをきわめて自由に解釈し、それを縮めたり、しばしばテーマや主調音を示す	第三のカテゴリー「変形」（隠れた内面の論争、自伝、告白、対話での応酬、見せかけの対話）	ディフォニー的（二声的）：能動的（自由間接法（変異（ヴァリエーション））（隠されたまたは大々的な論争）	(3) 能動的タイプ（投影された他者の言葉）（隠された内的論争、自伝や告白、他者の言葉を意識するあらゆる言葉、対話の応答、隠された対話）	3) 分析的なカテゴリーへの変形：引用する声は引用される声へ侵入する

提示するために、Bakhtin の諸理論を物語の構造論的研究として分析すると述べている。その分析の中核をなす、対話関係 (dialogisme) を論じるにあたって、Bakhtin は、「対立するものの併存 (アンビヴァランス)」という用語を前提にしていると述べている。Bakhtin が、「物語のなかでひとつになる二つの道」というときは、この「併存」を念頭においているという。すなわち、「テキストのなかへの歴史の (社会の) 挿入および歴史のなかへのテキストの挿入」という併存であり、また、「他のテキストの吸収およびそれへの応答としてのテキスト」という併存である。そして、Kristeva (1969 原田訳 1983) は、「ゆえに、Bakhtin は小説の構造を再評価することができるようになる」という。かつ、その再評価は、言説の分類を、物語のなかの言葉の分類と結びつけて行われるとしている (Kristeva, 1969 原田訳 1983)。ここでは、この Kristeva の「物語のなかの言葉の分類」を、Bakhtin の「間接話法、直接話法、およびその変形というパターン」に対応したものとして引用する。

【物語のなかの言葉の分類】

第一のカテゴリー「直接話法 (文体的統一)」: ある文脈の枠組みのなかでの、言説の主体にとっての意味の最終段階を表す明示的な言葉 (見本: 模倣、反復)

- ・他者の言葉にたいして距離を設ける。他者の言葉を活用するが、そこに含まれている思想を自分の目的のために損なうことはない。
- ・指向が言葉に浸透しない。別な意味を導入されない
- ・相対化することなく専有する

第二のカテゴリー「対立するものの並存」: 他者の言葉に対立するものを同時に含む言葉 (見本: パロディ)

- ・他者の言葉を用いて、そこに新しい意味を含ませながら、なおその言葉がすでにもっていた意味を保持しておくこともできる。その結果、言葉が二つの意味をもち、その言葉のなかで、対立するものが並存する
- ・ジャンルの進展の過程
- ・テキストが相対化される

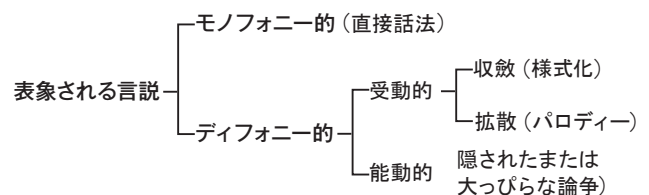
・「体験の写し」と「体験」そのものの共存

第三のカテゴリー「変形」: 他者の言葉が作者 (語り手) の言葉に積極的な (変更を及ぼす) 影響を与えている言葉 (見本: 隠れた内面の論争, 自伝, 告白, 対話での応酬, 見せかけの対話)

・他者の言葉は語り手の言葉によって表される

5-3. Todorov の〈他者の言葉論〉の解釈

Todorov (1981 大谷訳 2001) は、Bakhtin の意図は、「引用する言説と引用される言説のあいだに成立する関係を記述すること」、すなわち「言説内部の言説の表象の分析」の例証から、「他者の言説に「出会う」場」、「形式」、「変化しうる程度」の問題を省察することであるとして、当該の論述を再整理している。Todorov が示した要約は、以下のような分類である (Todorov, 1981 大谷訳 2001, p.131)。



要約に続く解説では、Todorov (1981 大谷訳 2001) は「モノフォニー的」を、「単声的」、「ディフォニー的」を、「二声的」、「能動的」を、「自由間接法」と言い換えもしている。「自由間接法」に関する記述では、その「現前の程度はさまざま」で、「ある限定された社会集団の集団的記憶のなかで自由に使用できる (中略)、Bakhtin が「変異 (ヴァリエーション)」と呼んでいる別種」も喚起されるとしている (Todorov, 1981 大谷訳 2001)

5-4. 桑野の〈他者の言葉論〉の解釈

桑野 (2020) によれば、Bakhtin の〈引用論〉の前提になっているのは、二声的な言葉であるとして、「ドストエフスキイにおける言葉 (文体論のみ)」における論述を紹介している。「Bakhtin による言葉の分

類図式」]としてあげられたものから〈引用論〉のための二声的な言葉に関する項目（〈他者の言葉論〉に相当する部分）を抜き出してみると、以下のような列挙が可能である（桑野，2020, p.121）。

[他者の言葉を志向する言葉（二声の言葉）]

（1）一方向の二声の言葉（直接話法）

- ・ 他者の言葉が引用されるケース
- ・ 声どうしが融合し、話し手の意味上の最終的な審級の表現に近づく
- ・ 文体模倣、語り手による語り

（2）多方向な二声の言葉

- ・ 他者の志向が強まり、内的に対話化され、二つの言葉（二つの声）に分かれようとする
- ・ パロディ的な語り

（3）能動的タイプ（投影された他者の言葉）

- ・ 他者の言葉は作者（話し手）のことばの枠外にはまっているが、作者（話し手）のことばはそれを考慮し、それに関係づけられているケース
- ・ 他者の言葉のほうが能動的な立場にある二声状態
- ・ 他者の言葉との相互関係はきわめて多種多様な形式を取ることができる
- ・ 他者の言葉による歪曲の度合いも多種多様
- ・ 隠された内的論争、自伝や告白、他者の言葉を意識するあらゆる言葉、対話の応答、隠された対話

5-5. Wertsch の〈他者の言葉論〉の解釈

Wertsch（1991 田島他訳 2004）は、〈他者の言葉論〉に先だって、まず〈権威的な言葉〉と〈内的説得力のある言葉〉について紹介している。これは、「ある声が他の声と接触し互いに活性化し合う、権威性の度合い」によってその違いを Bakhtin が特徴づけたものである（Wertsch, 1991 田島他訳 2004）。Bakhtin からの引用も含めた記述を列挙すると以下のようにまとめられる（Wertsch, 1991 田島他訳 2004, p.107）。

[権威的な言葉]

- ・ 発話とその意味が固定されており、他の新しい声と出会っても変わることがない、という仮定に基づいた言葉
- ・ 承認と受容を我々に要求し、自己を強制する
- ・ 我々はそれを、あらかじめ権威と結合したものとして見出す
- ・ 意味構造は「死せるもののごとく不動」であり、他の声との生き生きした接触を許さない
- ・ 自由で創造的な様式化を行ういかなる変奏（ヴァリエーション）をもゆるさない
- ・ 父親、大人、教師の言葉など、宗教、政治、道徳テキスト
- ・ ある部分には賛成し、また別の部分にはある程度まで受け入れ、また第三の部分は無条件に拒否するという風にそれを分割することはできない
- ・ 他者の声および社会的言語との接触能力がない
- ・ 描き出されず、ただ伝達されるのみ

[内的説得力のある言葉]

- ・ 半ば自己の、他者の言葉
- ・ 対話的な活性化をもたらす
- ・ 創造的な生産性は、自立した思考と新しい言葉呼び起こし、内部から多くの我々の言葉を組織化する
- ・ 他の言葉から孤立した不動の状態にとどまならない
- ・ 意味構造は完結したものではなく、開かれたものである
- ・ 自己を対話化する新しいコンテクストの中に置かれるたびに、新しい意味の可能性を余すところなく開示することができる

これらの記述を基軸に、〈他者の言葉論〉では、バフチンの他者の言葉論を概略化して、Bakhtin が詳細な分類を試みた引用の方法の別を、発話の例文を示して解説している（Wertsch, 1991 田島他訳 2004, p.110）。

[報告の発話の基本的な方法（例文にそって）]

- 1) 直接話法：引用する声と引用される声の間に声の接触はみられない
- ・ [他人の言葉としての] 本物らしさを保持しよう

とする

- ・ 他人の言葉をできるだけ明確・厳密に区別し、そこに書き手（話し手）のイントネーションが侵入することのないよう垣根をめぐらし、他人の発話のもっている特定の言語表現としての特殊性を凝縮し強化する

2) 間接話法：引用する声と引用される声の間に接触と相互活性化が認められる

- ・ 引用する声は引用される声を「受け取る」
- ・ 浸透性が「二声性」を引き起こす

3) 分析的なカテゴリーへの変形：引用する声が引用される声へ侵入する

- ・ 「分析的な精神」に依存して情報を表現する
- ・ 引用する声により広い選択肢が与えられており、それゆえに重い応答責任も与えられている
- ・ 引用される声でなく引用者自身の声を前面に出すことも自由である

いわく、「他者の言葉が権威的な言葉として引用されるか、それとも内的説得力のある言葉として引用されるかによって、相互活性化の強さが決まる」。また、「権威的な言葉は接触を疎外し、逆に内的説得力のある言葉は接触を促進する」というところに、Wertsch の他者の言葉論の特徴がみられる。

6. ポリフォニー論と引用概念

ここまで、対話原理と引用概念としての〈他者の言葉論〉を議論してきた。では、ポリフォニーと引用概念の連関はどうであろうか。〈ポリフォニー〉については、桑野（2020）が、その「定義ともいえる箇所」を紹介している。それは、「自立しており融合していない複数の声や意識、すなわち十全な価値をもった声たちの真のポリフォニーは、実際、ドストエフスキの長編小説の基本的特徴となっており、「自分たちの世界をもった複数の対等な意識こそが、みずからの非融合状態を保ちながら組み合わせあって、ある出来事という統一体をなしている」という Bakhtin の

論述である（桑野，2020）。そしてその、ポリフォニーと引用概念のとらえ方について、以下のような考察も述べている。この二声状態の問題は「Bakhtin の一貫したテーマで（中略）Kristeva のいうテキスト相互関連性との関係でいえば、ポリフォニーよりも、以下のような引用論のほうがテキスト相互関連性に近い」のだという（桑野，2020）。そして、「他者のことばと自己のことばのあいだの境界は柔軟で両義的であり、往々にして屈曲し、錯綜している」という Bakhtin の記述を紹介している（桑野，2020）。桑野は続けていう。「それはいわば、発話の内部に移された、ことばの主体の交替である。この交替がつくりだす境界は、この場合、弱まっており、特殊である。（中略）たしかに、わたしたちの発話の多くは、他者のことばを伝えている。意識しないままに、直接話法、間接話法、その他さまざまな話法を使っている。」（桑野，2020）。

バフチンからすれば、引用は広義の〈対話〉でもあった。（桑野，2020, p.134）

〈他者のことばの伝達〉の形式が、ポリフォニー、二声の状態、対話関係などの、その検証に意義ある現象であることは間違いない。〈他者のことばの伝達〉の形式、すなわち、引用の形式への注目、Bakhtin の対話理論を援用する領域の研究において重要であるといえよう。さらには、桑野（2020）のいう「積極的に Bakhtin の理論や思想を「現場」で実践していることへの対応としては、Bakhtin の諸理論のうち、実証的な研究において、その分析にこの“引用概念”を援用することには、大きな可能性があるのではないだろうか。次節では、実証的研究における引用概念援用の可能性について考察する。

7. 実証研究の可能性

Bakhtin の対話理論をはじめとする諸理論の援用では、たとえば対話主義やポリフォニーの定義を引用していたり、対話原理に基づくと述べて理論枠組みが示されていたりする例は枚挙にいとまがないが、実証

研究における分析では、朴・茂呂（2007）が、以下の点を指摘している。彼らは、子どもの協同課題解決の調査事例を例証した研究で、その考察において、「実際に、Bakhtin の用意した概念を、経験的な研究に利用しているものは、まだまだ非常に少なく、「経験的なデータへの適用にはさらに議論が必要」と述べている（朴・茂呂，2007）

Wertsch が、Bakhtin の「言葉の原初的対話性」をひもときつつ、子と親の問題解決の相互作用場面を実証フィールドに「精神機能の社会化に関する事例」から、「社会文化的アプローチ」の端緒を創生したことを範とするなら、同じく「〈他者の言葉の伝達〉の現象アプローチ」にも研究深耕の可能性があるだろう。Bakhtin の引用概念もまた、「社会的なもの」と個人の精神の連続性」を検証していく実証研究の一助となる。

佐々原（2013）の実証研究は、その可能性をみせている。この研究は、「引用」を導入した学級をフィールドに、「聴くこと・発言形成」の方略と話しあい行為の出現に関する研究である（佐々原，2013）。Wertsch の対話論や間接話法、「思考の道具」を援用しつつ、発達特性を踏まえた学習の方略について分析している。ここでの「引用」は、明示的かつ指示的な授業の特徴であり、Bakhtin の引用概念にあるような、話法や変形への着目は、研究の目的にはなく、分析は行われていない。引用を含む発話のコーディングは、「聴き合い型（同意、付加、学び等）」「問い返し型（確認、質問・疑問、反対）」「振り返り型（修正、創造）」として、ここから摘出される「引用を含む発話」の機能は4つとしている。4つは「根拠の提示」「共通点の提示」「論点の提示」「見直しの提示」である（佐々原，2013, p.379）。また、下位カテゴリも設け、「根拠」の下位カテゴリを「テキスト・既習知識」「発話」「論点」の下位カテゴリを「主張」「根拠」「根拠・主張」「論点」「テキスト」としている（佐々原，2013, p.379）。話し合いの方略が考察されるなかで、「探求的会話」を出現させるには、「自他の意見の対象化」を志向する方略を学習させることが重要であると述べている。そして、その方略がもたらした変化を4つにまとめている（佐々原，2013, p.389）。

- 1 他者の発話を即興的に取り込み、根拠や論点にする児童が増えた
- 2 他者の発話の背景にある「論理」を意識して聴くようになった
- 3 説明を引き出そうとしている
- 4 他者の解釈を取り込み、新しい解釈を生み出そうとしている

仮に、これらの研究成果を引継ぎながら、この論稿で改めて検討したような Bakhtin の引用概念を援用し、（あるいは、Todorov や桑野のまとめを枠組みとして）それぞれを「直接話法」的な受動であるとか、能動的理解のための変奏であるとかいった、分析指標として適用することは可能であろう。ここに、対話理論における引用概念を、実証研究に援用する可能性をみいだすことができる。

「社会生活や人間の生活がもともと対話的であること」をあきらかにした作家という意味でドストエフスキイは Bakhtin にとって重要だったのだと桑野（2020）は、「ポリフォニーと対話原理」の解説を締めくくっている。実証研究が対話を探求することの意義は、「社会生活や人間の生活がもともと対話的である」ということを主題に探求していく、その意味において、非常に大きい。

8. 例解：実証研究のフィールドとしてのワールドカフェ談話

「社会生活や人間の生活がもともと対話的である」ことが主題であるなら、実証研究のフィールドには、あらゆる場面が考えられる。そして、そこにおいて引用（他者の言葉の伝達）が行われていない可能性は、ほぼない。ここでは、例解の一つとして、「ワールドカフェ」と呼ばれるワークショップを挙げ、検討を試みる。

ワークショップは、参加型の学習機会で、学習論、教育学、コミュニケーション論、心理学や社会学、行政学などで研究対象になるいっぽう、それらがフィールドとする学問分野に加え、イノベーションなどの知識創造、環境啓発、まちづくり、合意形成、組織開発、医療福祉など多岐にわたる分野で応用されている実践

である。

組織開発分野では、ホールシステム・アプローチと呼ばれる独特のワークショップのプログラム群がある。ホールシステム・アプローチを、Holman et al. (2007) は、「多数の組織的イニシアチブを効果的に織り込んで、従業員のエンゲージメント、賛同、および結果を生み出す、適切に設計された、組織全体の変化への取り組み」と定義している。多くは、大規模な人数——構成員、利害関係者、参加者など——が一堂に会し、少人数に分かれて会話をを行い、課題解決や組織改革を志向するものである。

8-1. ワールドカフェの談話

ワールドカフェも、ホールシステム・アプローチの一つで、「集合の知恵を視覚化して、行動の優先順位を特定する」ことを目的としているワークショップである (Brown & Isaacs, 2005 香取・川口訳 2007)。標準的なプログラムでは、参加者全員を少人数のテーブルに小分けし、対話し、たびたび成員の組み替えを行う。成員が組み替えられることで、テーブルでの談話——主催者はそれを対話と呼ぶこともあれば、会話、議論、討議などと呼ぶこともある——は途切れるが、断絶しながらもある程度は保持されていく。新たな組み合わせとなった成員によって、それまでの談話のトピックが、新しい談話に“引用”されるからである。その成員組み替え——“席替え”と呼ばれたり、“引っ越し”と呼ばれたりする——直後の引用のふるまいは、社会生活において、日常のさまざまな実践共同体間を行き来するようすを模したのものにも見え、談話の重なりが、日常の談話の進展を急倍したもののようにも見える。

8-2. 談話の断片の検討

以下は、ワールドカフェでの談話の事例である。このワールドカフェは、2019年に広島県北広島町において、地域おこしのNPO法人によって開催された。休館した地域内の温泉施設の再建をめぐる利害関係者の対話の場であった。主催者が用意した対話のテーマ

は「“アクティブな温泉”とはどんなものか」であった。プログラム上の“席替え”は3回であった。参加者25名が6つのテーブルに分かれ、3つのテーブルで談話を20分程度ずつしたのち、最終の談話では、最初にテーブルに帰還し、成員は再会をした。

再会した最終の第4ラウンドのテーブルで、談話の中心となったトピックは、6つのテーブルで11あった。これらのうち、最初のテーブル（第1ラウンド）にもあったものは、9つで、2つは途中のラウンドから発生したトピックである。「サウナ」「芝生」「キャンプ」などのトピックは、「アクティブな温泉とは何か」に対応したものであるが、トピックによっては、多く話題に上がったり、途中で消極化したりしている。たとえば、「川辺（「川遊び」を含む）」は、偶然、6つすべてのテーブルの第1ラウンドでトピックとなったが、最終のラウンド（第4ラウンド）でこれを話題にしたのは1テーブルだけだった。同じように、「キャンプ（「テント」含む）」も、第1ラウンドは4テーブルあったが、第4ラウンドは2テーブルになっていた。逆に、「週末」は、第1ラウンドが1テーブルで開始されたものが、第4ラウンドでは5テーブルになっている。同じように、「ドラム缶風呂（「混浴」含む）」も、1テーブルから4テーブルに拡散している。

トピックは談話のなかでどのように発話に引用されているか。以下に断片を示す。

（最初の談話）

断片 01 テーブル3の第1ラウンド

01-03-01-030 I：温泉もねえ、わしちょっとみながら反省したんじゃけど、毎日やろう思うたらとりあえず無理じゃけえ、土曜日から日曜日週イチにね、週イチにとりあえず、なんか、するようなことにできんなあ思うてね、やるんだったらまあ、毎日は無理じゃけえ、あのう、週末だけに、それができんなああと、そいけ維持費の問題が、あるんだけだね。

（引用された最終の談話）

断片 02 テーブル1の第4ラウンド

01-01-04-033 D：そうそう、さっきもあのう、屋台をね、「ごはん6店舗ぐらい週末屋台がバァーッてあって、いろんなも

のが食べれて、夜とかライトアップしたらいいじゃないか」。みたいな、あのう、「カナダでラーメン屋をしていた」って男の子がおって、味噌ラーメンらしいんですけど、そしたらこっちのおっちゃんも「わしが骨組みつくっちゃるけえ！」みたいな、ゆってましたねえ。

01-01-04-034 B: それやってもらおう。すごいね！

(引用された最終の談話)

断片 03 テーブル4の第4ラウンド

01-04-04-009 N: あとね、ヨソではね、えーっとあの、「まあやっぱりみんなが集まる食べるところもほしい」、そしたらね、「屋台をね、あの、施設の周りに、1台じゃやっぱり、ナンだから6台くらい屋台をつかって、そうそういろんな店したら週末だけでもそこ屋台、昼から夜までやるとかしたら、あー、あっこならちよと行ける」、とかいう感じに、なるんじゃないか。屋台なら、ようするに、「建物建つ固定」、じゃないから、ね。ただ、ただ「冬がネック」とか、「冬はどうする」という感じだったけど。

(引用された最終の談話)

断片 04 テーブル2の第4ラウンド

01-02-04-059 G: そしたら、個店をもつというのはたいへんだけど、人が、おるところに行って売れるんなら、その、ときどきにイベントとか、例えば週末だけここに来るとか、いう、お彼岸には墓園に行くとか、なんかそういうのを打っていけば、案外、つなげるんかなと。バスに代わるような売上げにはならんけども、なんかそういう、今うちの社員が今遊んどる。そういうようなことを、やっていきやあ、ま野菜売るでもええし、

01-02-04-060 Y: そういうの移動販売、

(引用された最終の談話)

断片 05 テーブル1の第3ラウンド

01-01-03-045 K: うん。なんかそういうワイワイした雰囲気が僕大好きなんすよ、みんながすごい幸せそうに楽しそうにやっているとか、だけえそういう場所..が、こうま、毎日は無理でも週末だけでも、

(引用された最終の談話)

断片 06 テーブル3の第4ラウンド

01-03-04-016 L: う...ん、でしょうねやっぱ平日はねやっぱねお客さ..んがなかなかね、見込めないからちょっとねあのう、屋台もちょっとね厳しいかなって。まずは金土、日、かまあね土日ぐらいの感じね、その、

第1ラウンドのテーブル3のIが自身の考えとして提示した「毎日は無理じゃけえ、あのう、週末だけに」は、モノローグ的な発話である(断片01)。これが談話のなかで応答され話題化され、席替え後に、Iと同席であったKが、テーブル1に席替えした第3ラウンドで、「週末だけでも」と発話している(断片05)。ここに同席していたD、N、V全員がそれぞれ、テーブル1、テーブル4、テーブル6にもち帰っている(断片02、断片03)。また、第4ラウンドの他のテーブルでも、別の経路で知りえたGが、テーブル2で「週末」を話題にしている(断片04)。また、Iのいたテーブル3は、第4ラウンドでは、「週末」というタームが「金土日」に置き換わっている(断片06)。

トピックは、断片02のDや断片03のNのように、直接話法として、他者の言葉の本物らしさが維持される形で引用されたり、断片04のGのように、間接話法として、他者の言葉が浸透する二声性をもって引用されたり、断片05のKのように、引用にはみえない形式に変奏(変形)されて引用されたりしている。断片06のLのように、タームそのものが変形する引用もある。

9. ワールドカフェにみる引用の分析の可能性

前出の断片を含む談話や発話を分析するにあたって、どのような可能性があるかを検討する。目指すのは、「ある一つの声（「報告する声」）が他者の発話（「報告される声」）を報告する」「他人の言葉」がもたらす機能の解明である。なお、試論として、この論稿では分析の方略を示すにとどめる。

- (1) 3つのカテゴリー分析：最初に考えられるのは、Bakhtin および、先行研究にあるカテゴリー分けに沿う分析である。[直接話法（文体的統一）| 対立するものの並存 | 変形] という Kristeva による整理の解釈に沿う分析もありうるし、[モノフォニック | ディフォニック | 能動的] という Todorov による整理の解釈に沿う分析もありうるし、[直接話法 | 間接話法 | 変奏（変形）] という Wertsch の解釈による整理の解釈に沿う分析もありうるし、[一方向の二声の言葉 | 多方向な二声の言葉 | 能動的タイプ] という桑野による整理の解釈に沿う分析もありうるだろう。これらは、Bakhtin のテーマであった「個人的なものと社会的なもの」をことばの現実からみいだすことができる分析となるはずである。
- (2) 引用の生成と応答の分析：〈他人の言葉〉という「複数の声なんらかの形で互いに接触するアリーナ」でおきる「権威的な言葉と内的説得力のある言葉」の問題が連続性をもっているなら、その中間の概念を割り出す分析もありうる。温泉施設再建のワールドカフェの談話では、「談話が志向する“興味関心に合致する得がたい情報”に関する引用」と「談話に外部から持ち込まれた“権威的で規範的な情報”に関する引用」、また「“さっきのテーブルで話してた”という生成的で相即的な言葉に関する引用」とでは、応答に違いがある。新たな意味を生成する「能動的解釈」が、引用の形式によってその度合いを変えることを分析したい。とくにこの3つめの、「“さっきのテーブルで”」という語りをもつワー

ルドカフェのワークショップに独特の引用形式には注目をしたい。

- (3) 席替え直後の冒頭の発話の分析：「〈内的に説得力のある言葉〉が創造性を発揮して『内部からわたしたちの多くの言葉を組織』してくれる」（桑野，2020）なら、Bakhtin の次の記述は“ワールドカフェ的”である。いわく「内的に説得力のある言葉は、自己を対話化するあたらしいコンテキストのなかにおかれるたびに、あたらしい意味の可能性をあますところなく開示する」（桑野，2020）。たびたび“席替え”をし、成員の成員性を解体することは、擬似的に相即的に、ワールドカフェはその場で「あたらしいコンテキスト」を絶えず生成していくことでもある。席替え直後の冒頭の成員の発話は、コンテキストづくりに向かう傾向をもつ。この、席替え直後の冒頭の談話のラウンドごとの差異を追っていく分析は有効であろう。
- (4) 談話構文と集合知の関係の分析：「対話的出会い」から「創造的理解」に至ったかどうかとも分析できたらいい。たとえば、各成員の発話は、席替えを重ねるたびに、その発話の構文において、一文に含むトピックの数が増加していく。ときには、相互に矛盾するものも一つの発話で「報告」される。香取・大川（2011）は、ワールドカフェでは、成員の組み替えによって「会話から生まれたアイデアが相互につながり関連づけられて新しいアイデアを生み出していく」と述べている。これは、ワールドカフェを創案した Brown & Isaacs（2005 香取・川口訳 2007）のいう「集合の知恵の視覚化」でもある。集合知がどう形成されていくかは、トピック（テキスト）どうしの相関の形成過程から分析できるはずである。桑野（2020）は、〈民衆的グロテスク〉の概念の解説に「モンタージュ」というタームを用いて、Bakhtin の記述を紹介している。「偽って引きはなされ分かれたれていたものどうし相並べ、結合させ、偽って近づけられていたものを引きはなす必要がある。事物のこの新たな隣接をもとに、内的なリアルな必然性につらぬかれた新しい世界像が開かれるにちがいない」（桑野，2020）。すなわちこれは、

モニタージュとしての集合知の形成過程の分析である。かつこれは、Wertsch らが行ってきた学習場面での実証研究とはまた別の、答の定まっていない「知識創造」の場面での（つまり、どの情報に参照しても「正解である」という検証ができない状況での）「創造的理解」のメカニズムを検討する命題でもあろう。

- (5) 多声化と合意形成の関係の分析：後期バフチンの著述にあるように、「両者は溶け合うこともなければ混じり合うこともなく、それぞれがみずからの統一性と開かれた全一性を保った」ままがいに「豊穡化」するのなら（桑野，2020），はたしてそれが達成できたかどうか、達成の要因は何であったかには分析の価値がある。「豊穡化」が即座に「多声化」を意味するのではないと思われるが、さまざまな「声」がそこにあることは、合意形成にとって有利である。合意形成の側面から、内的な説得力のある言葉が、社会的な状況を形成していくメカニズムを検討することができる可能性があるにちがいない。

Bakhtin の対話理論のうち、〈他者の言葉の伝達論〉、すなわち“引用概念”に焦点化して、その概念の整理を行ったうえで、心理学や認知科学における実証的な研究において、その分析に援用することを検討してきた。

ここに列挙したのは、その分析の方略の提案である。テキストの詳しい解釈の具体を積極的には提示しなかった Bakhtin が、例外的に詳しく吟味している「現象」が〈他者の言葉〉、すなわち「報告する声」であることは、興味深い。〈他者の言葉の伝達〉の実証研究は、であるからこそ、この例外にかなない、Bakhtin の目指したものを継承することができる。

そのフィールドでは、どのような「他者の言葉の伝達」が行われているのか、そのことがどう対話を組織していくのか。発話理論や対話原理、多声性やポリフォニーとともに、“引用概念”の援用もまた、さまざまな学問分野で議論を活発にするうえで奏功であろうと思われる。さらには、その議論に寄与する意味で、対話はよいものだからなされるべきだ、社会は対話的に構築されるべきだ、との当為論を超えて、現象に着目

する実証研究の役割は、「社会生活や人間の生活がもともと対話的である」であるからこそ、大きい。

10. 展望と課題

Wertsch が「他人の言葉の問題」について議論する「その代わりに」傾注したのは、Vygotsky が基礎をなした社会文化的アプローチの拡張のための Bakhtin の諸理論の導入であった。それ以降もたらされた膨大な研究成果を踏まえつつ、「他人の言葉の問題」、すなわち Bakhtin の引用概念の領域を、再認識することに意義を見いだしたい。そして、朴・茂呂のいう、「経験的なデータへの適用」のために、多くの議論を行いたい。

課題は多い。引用の自由度が増すことの弊害をどう捉えるか。やまだ (2008) は、「引用の自由度が増すと、テキストはどこまでが『他者』のもので、どこまでが『自己』のものか、見わけがつかなくなる。本来的に『ことば』というものは、『私のものではない借りもの』であるが、『自己』『他者』、オリジナルな著作を創る『作者』という概念は、さらに霧散し拡張していきだろう。」と指摘している。日常生活より引用の自由度が多く与えられてしまうワークショップの現場が、そもそも実証の対象でよいのか。

「Bakhtin にとっての理論は、実践のなかで活かされてはじめて有意味なものとなるのであり、つねに「出来事」のなかの「行為」であることが重要であった」と桑野はいう（桑野，2020）。Wertsch (1991 田島他訳 2004) も、Bakhtin の問いによせて Holquist を引用している。

コミュニティが確立した儀礼に従って、ことばをコミュニティから取り出して、そしてコミュニティに返すのである。私の声は意味をあらわすことができる。しかし、それは他者の声とともにあるときだけである。それは、ときにコーラスとなり、最良の場合には対話となる (Wertsch, 1991 田島他訳 2004, p.95)。

「実践のなかで活かされてはじめて有意味なもの

なる」,「ことばをコミュニティから取り出して、そして の領域での頸木としたい。
てコミュニティに返す」,これらの言葉を、実証研究

引用文献

- [1] Bakhtin, M. (1929). *Мартинизм и философия языка*. Ленинград (バフチン, M. 桑野 隆(訳)(1989). マルクス主義と言語哲学 未来社)
- [2] 朴 東燮・茂呂 雄二 (2007). バフチンの対話性概念による社会心理研究の拡張 実験社会心理学研究, 46 (2), 146-161.
- [3] Brown, J., & Isaacs, D. (2005). *The world café: Shaping our futures through conversations that matter*. Berrett-Koehler Publishers, Inc. (ブラウン, J., アイザックス, D. 香取 一昭・川口大輔 (訳) (2007). ワールド・カフェ カフェ的会話が未来を創る ヒューマンバリュー)
- [4] 香取 一昭・大川 恒 (2011). ホールシステム・アプローチ 1000 人以上でもとことん話し合える方法 日本経済新聞出版
- [5] Kristeva, J. (1969). *Σημειωτική—Recherches pour une sémanalyse*. Édition du Seuil (クリステヴァ, J. 原田邦夫 (訳) (1983). 記号の解体学—セメイオチケ 1 せりか書房)
- [6] 桑野 隆 (2020). 増補バフチン カーニヴァル・対話・笑い 平凡社
- [7] 佐々原正樹 (2013). 引用を導入した学級における「聴くこと・発言形成」に関わる方略の習得—中学年の授業過程の事例的検討を通して— 日本教育工学論文誌, 36 (4), 375-391.
- [8] 佐々木 寛 (1988). 日本におけるバフチンの移入について 比較文学, 31, 99-114.
- [9] Todorov, T. (1981). *MIKHAIL BAKHTINE LE PRINCIPE DIALOGIQUE*. Édition du Seuil (トドロフ, T. 大谷尚文 (訳) (2001). ミハイル・バフチン 対話の原理 法政大学出版局)
- [10] Wertsch, J. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Harvard University Press. (ワーチ, J. 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子 (訳) (2004). 心の声 福村出版)
- [11] やまだようこ (2008). 多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル「対話的モデル生成法」の理論的基礎 質的心理学研究, 7 (1), 21-42.

参考文献

- [1] Brown, J. (2015, October 25). ワールド・カフェ ハンドブック ワールド・カフェ 20 周年記念日本イベント—ワールド・カフェが開く社会・組織・コミュニティの未来— 国際ファシリテーターズ協会日本支部
- [2] 桑野 隆 (2008). 「ともに」「さまざまな」声をだす 対話的能動性と距離 質的心理学研究, 7 (1), 6-20.
- [3] 坂本 喜代子 (2004). 相互作用分析による対話的コミュニケーションの研究 国語科教育, 56, 34-41.
- [4] 田島 充士 (2008). 単声的学習から始まる多声的な概念理解の発達 バフチンおよびヴィゴツキー理論の観点から 質的心理学研究, 7 (1), 43-59.
- [5] 田島 充士 (2008). 再声化介入が概念理解の達成を促進する効果—バフチン理論の視点から— 教育心理学研究, 56 (3), 318-329.
- [6] Wertsch, J. (1985). *Culture, communication, and cognition: Vygotskian perspectives*. Cambridge University Press.
- [7] Wertsch, J. (1985). *Vygotsky and the social formation of mind*. Harvard University Press.
- [8] Wertsch, J. (1998). *Mind as action*. Oxford University Press. (ワーチ, J. 佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子 (訳) (2002). 行為としての心 北大路書房)